



30mm

リンパ節転移により発見された前立腺癌の1例
藤田竜二、永井 敦、津川昌也、那須保友（岡山大）

症例は 48 歳、男性。左頸部腫瘍、全身倦怠感を主訴に 1993 年 8 月近医受診。左頸部リンパ節 生検、切除術施行しリンパ節に腺癌組織を認めるものの原発巣は不明であった。同年 12 月腹部 US にて腹部リンパ節腫脹、膀胱内への腫瘍の突出を認め、翌年 1 月当科紹介入院。右頸部、左 鎖骨上窩、両側腋窩、両側鼠径部にリンパ節を



20mm

前立腺は触診上明らかな悪性所見を認めなかったが、PSA 118 と高値を示したため、前立腺針生検施行、病理学的には低分化であった。近医でのリンパ節の生検組織は免疫組織染色（PSA、PAP



20mm

性を示した。多発性骨転移も認められ、DES-P、LH-RH agonist による治療を開始し、さらに IP 療法を 3 コース追加した。リンパ節の著明な縮小、マーカーの正常化を認め、7 カ月後の現在も再発を認めていない。



中央を越えない